「桃山学院教育大学研究紀要」発刊に寄せて

梶田　叡一

桃山学院教育大学は 2018 年 4 月に開学いたしました。私たちはプール学院大学の積み重ねてきた土台を踏まえながらも、いかにして新しい大学を創造するか、議論を重ねてまいりました。新しい大学ですから、新しい夢、新しい志が必要です。夢や志をシャープに研ぎ澄まして、集中し、一点突破全面展開を図りたい、と考えたわけです。この一点突破の矛先こそ「人間教育」ということになります。研究・理論と実践を往還させつつ「人間教育」を発展させていくことを念じています。この紀要が新たにスタートした本学の「人間教育」の志を導いていくものとなれば幸いです。

以下に、読者の方々の御参考までに、我々がこれまで「人間教育」ということで大切にしたいと考えてきたところを挙げておきたいと思います。

●「人間教育」とは、何よりも、人間的な成長・成熟を目指す教育である。社会で重宝される「有能な駒」の育成だけを目指すのでなく、＜随処に主となる＞「指し手」を育てることに、その意味での真の主体性の育成に、力を入れることである。こうした主体性は、自分自身の主人公になり、社会的な場でも自分の判断と責任を大事にしていくことである。

●自分自身の主人公になるためには、「現実」適応と「価値」実現の双方の志向性を持つ自己統制力が不可欠である。

ＴＰＯや時と場所の認識を含む「現実」検証能力をみがき、それによる自己統制力（自我機能）を強めていくためには、けじめを大事にし、自己規律を身につけること、我慢すること、等々の日常的な努力が必要である。

真・善・美などの「価値」の感覚を磨くためには、自分自身の「実感・納得・本音」の所在に常に関心を持ち、そこに根ざすことに努める習慣づけが大事であり、そうした基盤を持つ「志」なり「理想」なりを捜し求め、その実現に向けて時に応じ場に応じて努力する気持ちを持つことが必要である。

●こうした「人間教育」は、＜我々の世界＞（世の中・社会）を生きる力と、＜我の世界＞（自分自身の独自固有の世界）を生きる力、の双方を育てることである。

●「人間教育」のためには、言葉や概念を媒介とした教授・学習だけでなく、自然との触れ合いや、各種の社会的活動への参画、などの実体験を通じた学びが大きな意味を持つ。

●また「人間教育」のためには、傾聴と対話を基盤とした互恵的な人間関係の構築が大きな意味を持つ。聖徳太子の言う「和」の精神をここで思い起こす必要があるであろう。

●こうした「人間教育」は、師弟関係の中で実現していく。師となる人の絶えざる修養と指導の相手方に対する愛情ある見守り、そして支援と指導が必要である。また、学ぶ側においては、師を信頼し、直接の指導だけでなくその背中からも学ぶ、という姿勢を確立していくことが大切である。

本学の研究活動を通じて上記の諸視点がさらに研ぎ澄まされ、新たな教育理念として結実し、多くの学校現場での実践に生かされていくことを期待したいと思います。